

# きほく通信

第9号  
2008年  
10月15日  
発行

那賀地方  
患者家族会  
きほく

## わなんれん20周年記念大会 きほく設立3周年記念研修会

10月12日 粉河ふるさとセンター

爽やかな秋風が吹く、粉河ふるさとセンターにおいて、ポランテアを含め約140名が参加して盛大に開催されました。

開会前には、四郷千両太鼓のメンバーによる力強い「呼び込み太鼓」が演奏され、式典に花を添えてくれました。



開式は東本喜佐子会長が「20年前、孤独になりがちな難病患者や長期慢性患者がそれぞれの苦しみを語り合い、日本の医療や福祉の現状を少しでもより良く向上させたい」との思いから結成された和歌山県難病団体連絡協議会は現在22疾患2,200人の団体になりました。私たちは県内や近畿のみならず全国的な患者・家族の交流をはじめ、国や県への働きかけや地域の方々へ理解を求め、小さな声を集め、手をつなぐ活動を積み重ねて参りました。これからも地域のインフラとして地道な活動を続けてまいります」と開会の挨拶をおこないました。

つづいて中村慎司紀の川市長が歓迎の挨拶をされました。そのあと県知事（代理）、谷本龍哉衆院議員、石田真敏衆院議員、世耕弘成参院議員がそれぞれ祝辞を述べられました。

感謝状贈呈では平成元年の設立以来19年間会長を務め、広く社会に認知されるまで、先頭に立って努力をされた功績を讃え、20年度より顧問に就任された初代会長森田良恒氏（現きほく事務局長）に東本会長から感謝状が贈られました。

二部の体験発表では、大西セ



キ子さん（網膜色素変性症患者）が「私の半生記」と題して、「目が見えない病気になったときには親を恨みました。でもある時、患者会に参加し勇気を出して、自分は目が見えないことを人に伝えた時から心のこだわりはなくなりました。長女は結婚式の時、『目の不自由な中、私たちを育ててくれてありがとう』と言ってくれ、次女の時は『目と引き換えに私を生んでくれてありがとう』と言ってくれた時には、涙はとめどなく流れ、苦勞が報われた喜びが全身を包みました。」と感動的に話されました。



また、きほくの前会長吉村由里子さんが、「命がけで出産した子どもが白血病を疑われました。自分や子どもが病気で、素晴らしい主人と家族会があります」と前回発表された「魂は健常者」の後日談として発表されました。



記念講演ではJPA日本難病・疾病団体協議会代表幹事伊藤たてお氏を講師に迎え、「より良い医療と地域福祉を求めて」と題して、「難病対策も大きく変遷しました。疾病数も患者数もまた予算も増えています。患者を救うところには届いていません。患者や当事者自身が患者自身が自分の病気を正しく知り、病気に負けないためにも仲間を持ち、患者会などを通して社会的な関わりを持つ必要がある」と話されました。

三部では、演劇「華岡青洲の妻」が上演され、ひたすら難病に苦しむ患者を救いたいと願い、世界で初めて全身麻酔薬「通仙散」を完成させるまでの20年間の青洲の努力と情熱を、紀の川市の劇団「華岡青洲」に熱演していただきました。



お手伝いいただいた紀の川市ポランテア協議会（写真上）と県高等看護学院の生徒の方々（写真下）です。



きほくのホームページに発表等の内容を掲載しています。

【アドレス】<http://www2s.biglobe.ne.jp/~wananren>

【会長】 神森 和子  
紀の川市中二谷  
【相談室】 0736(77)5161  
【事務局】 〒649-6612 紀の川市北涌371  
森田方 0736(75)4413

